

ナイカワンガ村の漁業実態

真鍋尚也

(鹿児島大学共通教育)

フィジー諸島共和国の伝統的村落では健全な自然環境や社会システムを維持している。伝統的社会における人と自然の共生システムを理解する上で、漁獲量や漁場利用などの漁業実態の把握は重要な基礎的知見となる。そこで今回は聞き取りと漁獲物調査によりナイカワンガ村の漁業実態を把握することを目的とした。得られたデータをもとに、村での水産重要種である *Lethrinus harak* (現地名：カンパチア) と *Valamugil seheli* (カナゼ) の年間漁獲量を算出した。

カンパチア

聞き取り調査によると、カンパチアの漁場は河口域～サンゴ礁域で、特にその中間に位置するテラウやテイテイと呼ばれる場所でよく漁獲される。一本釣りと刺し網で漁獲されるが、漁獲物調査では刺し網でカンパチアが獲られることはなかった。このことからカンパチアは主に一本釣りで漁獲されると思われる。一本釣りはビリンビリンと呼ばれる筏に乗って行き、1艘につき1～4人で釣る。仕掛けは釣糸にハリとオモリがついただけの簡単なもので、それをビンに巻き付けて使用する。ビリンビリンは村で6艘あり、おのおの週4～5回出漁する。漁期は1年中である。3回の漁獲物調査の結果、1艘が1回の漁で漁獲するカンパチアの量は平均2.0kgであった。

以上の結果からナイカワンガ村におけるカンパチアの年間漁獲量を概算した。本種は一本釣りでのみ漁獲され、各ビリンビリンが週5回出漁すると仮定した。ビリンビリンは村で6艘あり、漁獲量は2.0kg (/1艘・1回の漁)なので、村が1週間で漁獲するカンパチアの量は、

$$\begin{aligned} \text{週間漁獲量} &= 6(\text{艘}) \times 5(\text{回}/1 \text{ 週間}) \times 2.0(\text{kg}/1 \text{ 艘} \cdot 1 \text{ 回の漁}) \\ &= 60.0(\text{kg}) \end{aligned}$$

となった。これを1年間に換算すると、

$$\begin{aligned} \text{年間漁獲量} &= 60.0(\text{kg}/1 \text{ 週間}) \times 365/7(\text{週間}) \\ &= 3128.6(\text{kg}) \end{aligned}$$

であった。

カナゼ

本種の漁場は河口近くの砂泥底である。刺し網（高さ 1m×長さ 500m）で漁獲する。干潮時に沖に移動する魚を一網打尽にするため、満潮時に網の両端が浅いところ、中央部が深いところに位置するように網を投入する。その後、干潮ごとに網をチェックする。村で網を持っているのは 3 人で、1 人が漁に週 3 回、2 人が週 4 回出かける。すなわち村全体で週 11 回出漁することになる。漁期は 8～11 月で、産卵のために河口近くに寄ってきたカナゼを漁獲する。2 回の漁獲物調査の結果、1 回の漁あたりの平均漁獲量は 1.4kg であった。

以上から、村の年間漁獲量を算出した。漁期は 8～11 月の 4 ヶ月間（122/7 週間）なので、

$$\begin{aligned} \text{年間漁獲量} &= 11 (\text{回}/1 \text{ 週間}) \times 122/7 (\text{週間}) \times 1.4 (\text{kg}/1 \text{ 回の漁}) \\ &= 268.4 (\text{kg}) \end{aligned}$$

であった。

今後の課題

今回得られた年間漁獲量から、カンパチアとカナゼ資源を持続的に利用しているかどうかを評価する必要がある。もしこれらの資源を持続的に利用しているのであれば、どのような文化的な要因（しきたり等）が資源の持続的利用に関与しているのかを明らかにしたい。